

## 電話ボックスから図書館に

リチャード・パウエル 教授  
(英語セミナー)



南ロンドン



ゴゾ島 (マルタ)

日本人と同じように、イギリス人もほぼ全員が携帯を持っているので、公衆電話の必要性は次第になくなりつつありますが、ピンク色の公衆電話が恋しい日本人と同じように、伝統的な「red phone box」が完全になくなったら悲しいと感じるイギリス人がいます。残念ながらピンク電話の行き先は博物館の展示ぐらいしか考えられないのですが、電話機を100年前に Sir Giles Gilbert Scott という建築家が設計した赤いボックスから取り除いたらそのボックスには様々な用途があるでしょう。

20年前は無線用の電気通信関係のボックスが登場し、携帯修理店も現れましたが、最近は電話と関係のない機能が多いです。夏休み中2週間かけてロンドン、ケンブリッジ、オックスフォードやブライトンを訪ねました。なんと田舎町の観光案内所、病院のない村の除細動機(AED)、海岸沿いにあるサングラス販売店、ロンドン市内のATM、カップケーキやコーヒー販売店として利用されているボックスを見ました。ボックスの順応性やそれらを利用する人間の想像力に感動させられましたが、或るボックスは特に印象的でした。それは南ロンドンで偶然に見つけた「phone box library」でした。誰でも本を置いたり、借りたりできる電話ボックスを利用した図書館です。





除細動機設備



カップケーキのキオスク

背景を調べたら、最初の phone box library は 2009 年に、移動式図書館の運行が停止されたサマーセット州の村で現れたようです。1960 年の公衆電話ピークの時、全国に 7 万個以上のボックスがありました、その 50 年後、ブリティッシュ・テレコム社が 9 割近くを回収したので、Westbury-sub-Mendip（人口：800 人）の村役場が電話機を取り除いた 1 箱を £1（約 130 円）で購入しました。村に設置されたボックスの棚に寄付された本を置いたら図書館になりました。その後ヨークシャー州を始め、他の田舎町にも次々現れました。ゴゾ島に住んでいる親戚によれば、英植民地であったマルタ共和国にも同じ形の phone box library が見られるという事です。

殆どの住民が知り合いである田舎では、信頼に基づいた無人図書館の成功が理解しやすいが、大都会で上手く運用できるかには疑問がありました。でも、南ロンドンのボックスを使う友人によれば、本が返されない場合もたまにはあるものの、殆どの利用者が本をちゃんと返すし、本を補う人々も多いし、書籍がなくなるというよりも増えすぎる心配があるそうです。

誰でも自由に入れる場所ですので、phone box library にはどんな図書が置いてあるのか興味がわきました。学生時代にはバス、列車やヒッチハイクで長い旅をしたものですが、荷物が重くならないように一冊だけを持ち運びそれを読みきったら、偶然会う旅人と交換する習慣でした。一生忘れない Hermann Hesse の「Siddhartha<sup>1</sup>」や Albert Camus の「L'Etranger<sup>2</sup>」（幸いに両冊とも薄くて軽い）を含む様々な小説を様々な言語で読ませてもらう機会に恵まれましたが、本を交換する機会が少なくなり、旅が終わる直前、読み物の質にはあまりこだわらなくなりました。電話ボックス図書館で様々な本を見た時に旅先の乱読の思い出もありましたが、ぎっしり本が詰まった本棚には文学・哲学・歴史などのやや難しい図書も多くて、狭いスペースにしては書籍の多様性がある事に驚かされました。せっかくの機会なので、高価で買わなかった Roberto Bolaño の未解決連続殺人事件を取り上げる「2666<sup>3</sup>」を借りました。900 ページもある小説ですので、日本に帰る前に半分ぐらいしか読み切れませんでしたが、ボックスにちゃんと返却しました。次回ロンドンを訪ねた際に万一まだ置いてあればその後半を読むのを楽しみにしています。

- 1) ヘルマン・ヘッセ (1877-1962) 「シッダールタ」 (1922) (高橋 健二 翻訳、新潮文庫、1959)
- 2) アルベール・カミュ (1913-1960) 「異邦人」 (1942) (窪田啓作 翻訳、新潮文庫、1963)
- 3) ロベルト・ボラーニョ (1953-2003) 「2666」 (2003) (野谷文昭 翻訳、白水社、2012)